

多媒体を取り入れた音楽科鑑賞授業における 質の認識に関する実践的研究

— 媒体間の関連性に着目して —

学籍番号 229342

氏名 山下 真依

主指導教員 兼平 佳枝

副指導教員 藤本 佳子

I. 研究の背景

筆者が小中学校で受けてきた音楽の授業は技能中心のものが多く、そんな中で、たとえ楽器や歌の演奏技能が身に付いたとしても、自分の将来には役に立たないという声を耳にすることもあった。そこで、学校で全ての子どもが音楽の授業を受ける意義について考えながら音楽教育を学ぶ中で、J. デューイの芸術論に基づく、質の認識を重視した音楽科授業に興味を持った。質の認識とは、日常の様々な事象に対して、数字や記号では把握することができないような「〇〇な感じ」といった質を、感覚器官を通して直接把握することである。そして、先行研究から知見を得る中で、子どもが音楽の質を捉える手段として、言語、身体、視覚的媒体があり、身体や視覚的媒体は質を捉える方法として有効とされていることが分かった。そこで、質を捉える手段として多媒体を取り入れた音楽科授業では、異なる媒体同士がどのように関連し合いながら音楽の質の認識が深まっていくのだろうかという疑問を持った。

以上より、本研究の目的は、多媒体を取り入れた音楽科鑑賞授業での、子どもの音楽の質の認識の発展過程における媒体間の関連性を明らかにすることである。研究の方法として、まず、多媒体を取り入れた音楽科授業、および音楽科における質の認識の発展過程について、先行研究やデューイの著書をもとに理論研究を行う。そして、理論的視点を踏まえて多媒体を取り入れた音楽科授業の計画・実践及び、授業記録に基づく授業分析を行い、結論と考察を述べる。

II. 多媒体を取り入れた音楽科鑑賞授業

まず、芸術における媒体とは、表現者が、自分の内なるもの（感情やイメージなど）を相手に伝えるための手段であり、音楽においては、音が媒体となることが明らかになった。

そして、音楽科における歌唱、器楽、創作、鑑賞のすべての音楽活動は、活動を通して子どもの内側と外側に二重の変化をもたらす〈表現〉という営みであるとされ、鑑賞授業においては、楽曲を聴いて生じた自分の感情やイメージなどの内なるものを、言葉や身体の動きなどによって人に伝えられるという。したがって、音楽科鑑賞授業における媒体とは、楽曲を聴いて生じた自分の感情やイメージなどを相手に伝える手段となる、言葉や身体であると言える。

以上のことから、本研究における多媒体を取り入れた音楽科鑑賞授業とは、音楽作品から感じ取った質を他者に伝えるため手段として、言語、身体の動き、色彩・形など、複数の媒体を関わらせた授業を指すと規定した。

III. 音楽科における質の認識の発展過程

先行研究に基づき、まず、音楽科授業における質の認識を、「子どもと音や音楽との相互作用という連続的な働きの中で、音楽の諸要素によって生み出される『～な感じ』といった音楽

の内容的側面がどうなっているかを理解すること」であると規定した。

そして、音楽科授業を、「主体である児童や生徒が、環境としての音や音楽に直接働きかけ、その働きかけを受けるという相互作用行為」という音楽的経験に基づくことを前提とする場合、音楽科授業における質の認識は〈質の受容〉〈質の識別〉〈質の表現〉という過程を辿って発展していくということが明らかになった。以下は、各過程の概要である。

〈質の受容〉	身体諸器官を働かせて音や音楽と積極的に関わり、質を感覚的に受け取る。
〈質の識別〉	受容した質を、言葉や動き、線画などの形を伴って客観的に確認する。
〈質の表現〉	捉えた質を再構成して、演奏表現や音楽作品、批評文などに表現する。

IV. 研究授業の計画・実践・分析

筆者は、多媒体による質の認識方法として、図形楽譜づくりの活動を取り入れた音楽科鑑賞授業の研究授業を実践した。図形楽譜づくりとは、音楽から聴いて感じ取ったことを色や形で表現するものである。今回は、シューベルト作曲《魔王》を「声の音色」を指導内容とし、父・子・魔王の3人の登場人物の各場面について、図形楽譜を作成させた。

そして、授業分析においては、まず、逐語記録やワークシートをもとに、抽出生徒となる松井（仮名）が父・子・魔王それぞれの音楽の質に対して、「〇〇な感じ」と発言していたり、直感的に図形を選び取るなどの反応が見られる場面を時系列に抽出した。そして、理論的視点をもとに、以下の3つの分析の視点を設定し、授業分析を行なった。

- ア) 松井は音楽のどのような質に対して、どのような反応を示しているか。
- イ) ア) の松井の姿は、質の認識の発展過程のどの段階に当てはまるものか。
- ウ) この場面で松井が音楽の質を捉える過程において、媒体としての言語と図形はどのように関連し合っているか。

V. 結論と考察

実践分析の結果、抽出生徒の音楽の質の認識の発展過程において、言語と図形という異なる媒体間の関連性として、以下のような結論が導き出された。

- ①感覚的に受容していた質は、図形に置き換えられることによって、視覚的に確認可能になる。それと同時に、既に言語によって識別されていた質は、感覚的に捉えられていた質と統合されることによって、言語化しきれない、より微妙な音楽の質も可視化されるようになる。
- ②図形で置き換えられた質は、他者から図形の意図を尋ねられると、言語によってその質が共有され、識別に至る。
- ③自分が音楽から捉えた質と、他者によって示された図形が持つ質との不一致が起こると、それを解消しようとする際に、捉えた質が言語によって共有され、識別に至る。

本実践において、図形によって置き換えられていた質が言語によって外側に表された場面は、すべて他者との関わり中で実現されていた。したがって、視覚的媒体を取り入れた音楽科授業において、子どもが質の認識を豊富に発展させていくためには、授業内で活発なコミュニケーションが行われることが重要であると考えた。